

野宿することになり、夕食はパンと魚、肉をいぶしてかわかした物を食べた。水はやつと中国人の部落からもらった。その晩はよく眠れず、孤児たちの世話をした。朝九時過ぎ、やつと共産軍の渡し船で向こう岸にたどりつく。炎天の中で、私は倒れそうになった。船から降りて、約二キロの原野を列車の線路まで歩きつづけた。駅もない原野の鉄道線路には無蓋貨車がおいてあり、五両ぐらいであったのではないかと思う。孤児一人一人を手で貨車に乗せた。転落しないように大人は外側にすわり、気をつけて見まもった。その晩大雨が降り、体全体が「濡れそぼつ」風邪を引く者も出る。やつと二十四時間かかって奉天駅に到着、下車、難民収容所に二泊、ここでは日に三度高粱食であり、孤児の中には下痢が発生して、手当てに苦勞。

九月一日、いよいよ奉天発十時三十分錦州に向かった。午後四時錦州に到着。全員無事を喜びあった。旧日本軍軍馬の小屋でとまった。コンクリート、馬糞の臭が鼻につき、寝れなかった。翌二日錦州出発、コロ島に到着したのは夕刻。旧海軍の兵舎、屋根もなく床

もない、アンペラを敷き、孤児と共に夜は月がこうこうと明るくかがやきわたって見えた。ここで毎日何となく約十日間が過ぎた。九月十八日、いよいよ内地に帰ることが伝えられた。一行六十三人は、コロ島の岸壁で一人一人の持ち物を検査され、異常のない者から次々とDDTを頭から背中から散布された。

幼な子を抱えて苦難の逃避行

福島県 鈴木末子

私は形ばかりの結婚式をあげ、夫正雄と一緒に昭和十八年二月渡満し、三江省佳木斯市の東満社宅に落ちついた。昭和十九年四月十八日長男を無事出産した。親子三人の安穩な生活も一年足らずで、あの苦しみが、はじまった。

佳木斯はソ満国境に近く、昭和二十年八月九日ソ連軍の侵攻が始まり、避難命令が出てなんの準備も出せず、ただオロオロするばかりだった。

家財道具は、会社が預かるから、とにかく、一刻も早く安全な所に行くようにいわれ、着のみのまま身体には子供のオムツになる木綿の反物を巻きつけ、当座の食糧等わずかのものをリュックに入れ、背負い、子供を前に抱きかかえ、いちおう開拓団の方達のところに行こうと、新潟、長野県の人達のいる弥栄駅の線路沿いに南下したが、命からがら裸同然で逃げて来た人達が弥栄駅附近に、あふれていた。逃げる途中、子供の手を離し、はぐれてしまった母親の悲しそうな顔、病気の者は、食物を置いて来たと涙を流しながら話す人達ばかりであった。

主人は既に召集され、私は子供と二人だけなのでこの人達と合流し、馬小屋や物置に藁をかぶって、息をひそめて隠れ、赤ん坊や子供は絶対泣かせるなどいわれた。

泣きそうな子供を夢中で口を押さえ、気づいた時は死んでいた。日中逃げれば、機銃掃射され、橋の下や土手に身を伏せ、夜になって、見るとそのまま息絶えていたり、誠に悲惨な状況であった。上の命令で、

貨物列車に乗せられ、どこに行くのかも知らされず、停車したところで真暗のなかで、溜まり水をむさばるように飲んだ。明るくなって見ると、汚水で、ポウフラがわき、普通では飲めるような水ではなかった。

そのうち汽車が止まり、全員貨車から降ろされ、目的地も判らず、強制的に歩かされた。食糧もなく、裸足で歩く人もおり、栄養失調で身体が弱り、途中でバタバタと倒れ死んで行った。最初のうちは、土に埋めたが、数があまりにも多く、襲撃のおそれもあり、先を急がなくてはならず、そのままにして黙々と歩き続けた。

やっとの思いで、綏化の飛行場に到着し、格納庫のコンクリートの上に寄せ集めた草木をフトンにして皆寄り添って寝た。

食物は、少し配給された。一緒に佳木斯を出たうち何人もの姿が見当たらず、途中で非業の最後を遂げたものと思う。

格納庫での生活は、食糧不足による栄養失調、発疹、チフスにより、毎日、毎日、何人かの人が死んでゆき、

格納庫の周辺はいたるところ墓地となっていた。やがて、このままでは越冬は不可能で、全員死ぬほかはないと、避難南下することになり、貨車で出発した。貨車の中でも死ぬ人が多く、貨車の止まった時、線路の脇に置き捨てるように土をかけてやることも出来ず、肉親の泣き声だけが木霊し、私達も貰い泣きが毎日続いた。

ハルピンで貨車がとまると、ソ連兵に引き降ろされる奥さんを助ける主人が共に銃殺されてしまった。何人も人が無差別に殺され、ホーム内の防空壕は死人の山となった。

治安が悪く、下車することも出来ず、新京の会社の社宅に入れてもらうまで生きた心地がしなかった。

それから七か月間、母と子が生きるため、飴売り、満人の子守、家事手伝いなど、どんなこともしなければならなかった。

さいわいにも義父が憲兵で、満人を良く世話をし、その恩を忘れずに食べ物や衣服をもつて来てくれ、「日本に帰るまで頑張るよう」励ましてくれ、何よりも心

強く私と息子が今日あるのもこの満人のおかげと感謝している。佳木斯を出る時、七歳以下の子供は百二十人いたのが、帰国出来たのは只の二人と聞く。りつ然としました。さいわいにも私達二人は、二十一年七月、無蓋車に乗せられ、皆で、かばいあいながら錦州に到着し、何日か船待ちをし、コロ島より博多港につき祖国日本に帰ることが出来ました。やがて主人も復員し、農業をしながら生活再建のため働き続けました。今思い出すことも口にすることも嫌で嫌でなりません。再びこのようなことが、あつてはなりません。現地で生きるため、満人の奥さんになられた方、親の手を離し、行方不明となった孤児の方々が一日も早く肉親に再会出来ることを心から願ってやみません。

満州開拓団の末路

岐阜県 玉田 澄子

今年も八月九日が巡ってきた。当時七歳だった私に